

2004年4月

「兵は凶器なり」(21) 15年戦争と新聞メディア

- 1926 - 1935 -

メディアヘテロ頻発・命がけの報道戦へ

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

明治から大正にかけて「日本一の新聞」といわれた『時事新報』は、大正末期から経営不振に陥り、一九三六(昭和11)年十二月について廃刊になり『東京日日』(現『毎日新聞』)に合併された。

『時事新報』は一八八二(明治15)年3月に福沢諭吉が創刊、国権伸長をスローガンに、一八九三(明治二十六年)年には英国のロイター通信と特約するなど、高級紙として部数を大いに伸ばし、自他ともに「日本一の『時事新報』」と認められていた。

ところが、“黄金時代”は長く続かず、一八九八(明治31)年に大阪で『大阪時事新報』を創刊したが、これが伸び悩み、経営の足を引っ張り、そのうち本体も危うくなった。

1・新聞の勢力地図が変わる

特に一九二三(大正12)年の関東大震災で大きな打撃を受けた。追いうちをかけるように、大阪勢の『朝日』『毎日』が東京で一大販売攻勢をかけ、決定的なダメージをこうむり、『国民新聞』『都新聞』ともども東京の新聞は一挙に衰退、廃刊へと向かった。

『時事』の経営陣は次つぎと変わり、慶応義塾出身の実業人がバックアップしたが、奪回できなかった。鐘紡の社長として当時の日本実業界のリーダー役だった武藤山治が登場したのは一九三二(昭和7)年4月のことである。

武藤は温情主義を唱え、日本の労働運動史上でも特異な存在で主義を実践するため政界へ進出、国民同志会のリーダーとしても活躍したが、約十年で政界から引退した。

それからわずか四ヵ月後に『時事新報』の再建役に引き出された。武藤は自由主義者であると同時に、産業の振興をはかることにより、民心の安定を願う実業家でもあった。不正を憎み、正義感が強く、プラトンの「憤激性なき国民は亡ぶ」を自らの信条としていた。

実業家が政治に対して無関心なのが政治の腐敗を生む原因であると考え、政治の世界へ入った。特に、財界人の政商的行動を非難し政商こそ政治を腐敗させ、経済を混乱させる根源だと憎んだ。

政治家としては治安維持法に反対して大論戦を展開したことは有名で、「治安維持法は国民の思想を強引にしばる」と強く反対した。こうした武藤だけに、『時事新報』の路線は従来の伝統を破り、黒岩涙香の『万朝報』流の政財界の腐敗を真正面から追及する暴露キャンペーンをとった。

2・「番町会を暴く」のキャンペーン

その攻撃のものすごさは今でも新聞界の語り草となっている。武藤は、自ら「思うまま」「月曜論説」で縦横無尽の筆をふるい、「番町会を暴く」の一大キャンペーンを張った。「番町会」とは当時の財界の巨頭・郷誠之助(東京商工会議所会頭)を囲む河合良成、永野護、正力松太郎、小林中らの若手実業家十数人のグループのこと。

渋沢栄一の引退後、郷は財界世話人として活躍、そこにやり手の若い実業家が集まり、斎藤内閣の文部大臣鳩山一郎、商工大臣中島久万吉、鉄道大臣三土忠造らも深く関係し、政財界の一大グループとみられていた。

この番町会が台湾銀行が所持していた帝人株を仲間で巧みに処分し、巨額の利益を上げたとして世の批判を浴びたのである。

問題となった帝人株は一九二七(昭和二)年に金融恐慌で親会社の鈴木商店が倒産した時、台湾銀行が担保として取ったもので、その後、台湾銀行も休業に追い込まれ、日銀から特別融資を受けるため、日銀が預かっていた。

業績好調の帝人株をめぐって、これを好条件で売却しようとする台湾銀行と帝人株を狙う実業家も多く、結局、河合良成を代表とする買い受け団が永野護、正力松太郎らの政治運動で十万株の買い受けに成功した。

永野、河合は帝人の重役におさまり、中島久万吉商工相の管轄下で株式上場の認可を受けた。

河合らは一株百二十五円で買ったが、その後、株価は百五十円から百九十七円まで急騰、「不当に安い売買で台銀の損失は多大だ」と“疑惑”の声があがった。

武藤は政治家と財界人の癒着による政治の腐敗が諸悪の根源だ、として激しく批判、この番町会の疑惑追及に立ち上がった。そこには武藤の不正への怒りと強い正義感があった。

「番町会を暴く」は一九三四(昭和9)年一月十七日から始まったが、武藤の考えで大々的な社告を出して一大キャンペーンの宣戦が布告された。

「社告」は次のようなものだが、功なりとげた実業家、政治家の武藤があえて政財界攻撃に立ち上がった背景には、彼のきびしい社会正義への希求と言論の使命感がみなぎっていた。

「番町会のメンバーには財界の巨頭を首脳とし、現内閣の某大臣あり、新聞社の社長あり、政権を笠に金権と筆権を擁して財界と政界の裏面に暗躍する暴状は目に余る。……権力を背景とする不義不正が横行するに対し、言論機関の使命の為に断じて黙過すべきでない。本社はこの伏魔殿の陰謀に対し忌憚のない摘発を加え、もって社会の批判に訴える」

この社告は、日本の一流紙では前代未聞のことで政財界に大きなショックを与え、「番町会を暴く」は一大センセーションをまき起こした。編集局総務にあった和田日出男が執筆、紙面上では大森山人のペンネームで、三月十三日まで56回連載された。

当時、東北の冷害、凶作は深刻の度を加え、娘の身売り、欠食児童、借金苦の自殺など惨状を極めていた。政治は無力化し、党利党略にあけくれ、疑獄事件もあいつぎ、政治不信からのテロが頻発した。右翼暴力の脅威に人びとも新聞もおびえていた。

「実に最近の二、三年は右傾暴力によって社会に甚だしい脅威を受けた。しかし、今では一時のように明日にでも世の中が一変するかの如き懸念を抱かせる尖鋭的な非常時気分はまず解消した」(『東京朝日』一九二四年三月十九日社説「社会危機への

無防備」と書いている。テロや暴力は一向に収まっていなかった。

『読売』の正力松太郎が番町会の有力メンバーだったため、このキャンペーンは商売仇の『読売』たたきか、と評判になったが、決してそうではなかった。

3・武藤山治、テロに倒れる

連載は大きな反響を呼び、新聞の売れ行きも好転した。

二月二十四日には武藤が自らペンをとった十万枚のビラが東京都内に配られた。「番町会への筆誅は彼等一味を震撼せしめ、遂に中島商相の辞職となる！今や斎藤内閣は暗雲にとざされている。何者をも恐れざる正義の筆陣を連日展開せしめつつある時事新報を御覧下さい」

武藤が凶弾に倒れたのはこれから約二十日後、「番町会を暴く」がますます佳境に入っていた三月九日のことである。

この日、武藤はいつものように午前九時十五分ごろ、北鎌倉の自宅を出た。秘書の青木茂(23)を伴って北鎌倉駅へ向かった。途中、福島新吉(41)という者が武藤に話しかけ、いきなり持っていたコルト式短銃をつきつけた。

驚いた青木秘書が武藤をかばって立ちほだかったところ、二発の銃弾を受け即死、武藤も続けて銃弾を首、下腹部、足に受け倒れた。犯人の福島はその場で自分の口に銃口を当てて発射して自殺した。

武藤は近くの病院に運ばれたが、約36時間後の翌十日午後9時20分に亡くなった。享年六十八歳。政財界、新聞界に大きな足跡を残した巨人の最期であった。

『東京朝日』は三月十日夕刊一面をほぼ全面つぶし「暴漢に狙撃され武藤山治氏重傷犯人その場で自殺」(四段見出し)「犯人は失業者」「『あんまりです』と叫んで乱射す火葬場問題の私怨」と大々的に報じた。

『東京日日』も「けさ武藤山治氏狙撃され生命危篤、大船から上京の途襲わる」(五段見出し)「思想団体とは関係のない犯人、ながい失業に苦しむ」と報じた。

犯人の福島新吉は中野正剛の紹介状を持って武藤に面会、「火葬場は私営を廃し

て公営にすべきである」と意見を述べ、武藤もこれに同感し「思うまま」に書いた。福島は自分の話を材料に書いたのだから原稿料を寄こせ、と要求、話し合いの末、三十円を払った。『時事』側はこれで結着したと思っていたが、福島はひどい生活難に陥っており、なおも武藤に金を要求、凶行の当日も催促を迫ったものとみられた。

福島がその場で自殺したため、真相はナゾに包まれたが、犯行数日前、福島が番町会のメンバーの一人のところを訪ねており、番町会が背後にあったのでは、との疑惑ももたれた。

『時事新報』は「火葬場問題は昨年中に解決した問題であり、福島が河合良成や番町会系の弁護士と凶行直前に接触したこと」を紹介、「凶漢の背後に躍る、奇怪な番町関係者」の記事を掲載、十一日朝刊では「武藤氏暗殺の原因は断じて私怨にあらず、テロの謎は永久に遺る」の見出しで、番町会との関係の疑惑を何点か挙げた。

結局、番町会関係者の捜査からは何も出ず、福島の私怨が原因とされ、謎に包まれたままに終わった。

4・新聞街は右翼テロや暴力におびえる

新聞人への直接テロは何件かあったが、社長が拳銃で射殺されたケースは初めてだった。それだけにジャーナリズム、新聞関係者へ与えた衝撃は想像以上に大きかった。ペンをより萎縮させ、おざなりの言論、強いものへの追従、おべっかがいっそう強まってきた。

『東京朝日』は三月十日「憂うべき殺伐の気風」でこう論じた。

「近頃、殺傷沙汰の頻発に寒心を禁じ得ぬ折柄、武藤氏がまたその犠牲者となったのは痛嘆に堪へない。私怨にせよ、公憤にせよ、理を以て争わず、直に暴力に訴うるの蛮風の横行まことに悪むべきである。……」

この蛮風が克服されぬ限り、ただに一般の治安維持が害せられる許りでなく、暴力の脅迫は遂に人をして強く行う事を避けしむるであろう。かくて世を挙げて御座なりの言動のみをもって明哲保身の道となすに至るを深く遺憾とする。……恐るべきは日常生活における虚無主義の浸透である。これが暴力是認の思想と結びついて軽々しく自他の生命を絶つを意に介せぬ時、国民生活は内部から崩壊して行くの外は無い」

『時事』は十一日社説「言論に対する直接行動の脅威」で、「直接行動の脅威を以て、正義の言論を屏^{へいそく}息せしめんとする何等かの意思に発したるものとすれば、吾々は寧ろ之と反対の効果を証明せんと欲するものである。而して斯かるテロリズムを以て正論を屏息せしめんとする蛮風に対して徹底的糾弾摘発を加う可きは正に司直の任でなければならない」と述べた。

石橋湛山は『東洋経済新報』の三月十七日号で「武藤山治氏を偲ぶ」でこう論評した。

「銀行家とか、実業家とか、資産家とかは出来るだけ物を言わぬ。得になる場合でなければ身を動かさぬ。これが先ず我が国の金持階級の状態だ。武藤氏もこうしておれば、苦勞はなかった。今度の如き不慮の災難に遭われることもなかったであろう。しかし、武藤氏はこうしていられなかった。ここに氏が社会に於けるズバ抜けた存在たらしめる所以があった」と、その死を惜しんだ。

たしかに、武藤へのテロは福島の個人的な原因による不慮の災難であったかもしれないが、彼の思想と行動は当時の日本の政治、経済の最腐敗部に向けられており、そのまま活動を続けていればいつかはこうした犠牲者になったのではないか、そんな感じがする。

新聞街が右翼テロや暴力におびえきっていたとき、再び事件が起きた。

武藤がテロに倒れてから約一ヵ月半後。こんどは『東京朝日』の編集局内で日本刀を持った暴漢が暴れ、編集総務の鈴木文四郎が斬られて重傷を負うという事件が発生した。

5・朝日編集局に日本刀の暴漢乱入、4人斬られる

四月二十六日正午ごろ、『東京朝日』三階の編集局内で、男が突然約30cmほどの日本刀を引き抜いて怒号、居あわせた庶務課長が斬られたため、編集局員十数人が取り押さえようとした。暴漢はこのなかの一人、編集総務の鈴木を背部を斬り、さらに副守衛長ら3人に怪我を負わせた。

すぐに取り押さえられたが、この犯人は直井安太郎(33)。ヤクザの子分で、親分検挙のニュースが『朝日』で報道されたことに腹を立て、取り消しを求めたが、『朝日』が

応じなかったため犯行に及んだことがわかった。

鈴木は全治一ヵ月の重傷だった。まさしく、「命がけの報道」の状況に突入したのである。

事態を重視した新聞人の親睦団体である「廿一日会」はこれら暴力の横行に対して、五月二十五日、内務省警保局長、警視総監を訪問、右翼団体の取り締まりと新聞通信社の言論の保護徹底について陳情した。

一九三五(昭和十)年度版の『新聞年鑑』は「命がけの報道戦」と題して、こう指摘している。

「当局の記事差止、発売禁止処分による新聞社の被害と報ぜらるべきを報ぜられなかった読者国民の損害もさることながら、新聞人は政府の統制のほかに、まだ多くの恐るべき危険、迫害にさらされている。言論、報道のために右翼あるいは種々の暴力行為の的となることだ。公にされざる程度の暴力からくる危険、迫害の実例は枚挙にいとまない。今や新聞の言論、報道はじつに命がけの大仕事となってきた」と。

(つづく)

www.u-shizuoka-ken.ac.jp/~maesaka/maesaka.html